

2021-2022 年度
鹿児島県霧島アートの森 アートラボ

美術作家 平川渚
「手編みの物語をあつめる」
プロジェクト

2021-2022 年度 鹿児島県霧島アートの森 アートラボ

美術作家 平川渚「手編みの物語をあつめる」プロジェクト

■手編みの編み物とエピソードの募集

2021年4月15日(木)～5月30日(日)

募集場所：くりの図書館、湧水町観光協会、吉松物産館ふれあい市場、鹿児島県霧島アートの森

■プロジェクト展「いとなみ」

2021年10月1日(金)～11月7日(日)

会場：くりの図書館

■あみもの座談会

2021年10月2日(土)・11月7日(日)

会場：くりの図書館

■「あみものをほどく」ワークショップ

2021年11月12日(金)～11月21日(日)

会場：くりの図書館

■間借りオープンアトリエ(公開制作)

2022年5月27日(金)～6月1日(水)

2022年6月28日(火)～7月2日(土)

2022年10月29日(土)～11月6日(日)

会場：くりの図書館

■個展「あなた／あなたとの会話」

2022年12月21日(水)～2023年2月12日(日)

会場：鹿児島県霧島アートの森

主催：鹿児島県霧島アートの森

プロジェクト公式 Instagram
二次元バーコード



ごあいさつ

美術作家 平川渚は、地域に滞在しながら土地の記憶や人々の営みを手がかりに糸を空間に拡張させる作品を制作してきました。また近年は、人々から集めた古着や編み物を素材にそれらが持つ「個々の物語」に着目した作品も発表しています。

2022年度の平川の個展に向けて2021年度に始まった「手編みの物語をあつめる」プロジェクトでは、新作の材料となる手編みの編み物とそれにまつわるエピソードを本館の地元である湧水町の人々から集め、それらをほどいて毛糸に戻し、さらにひとつの大きな作品へと編み直すためのプロジェクトを展開しました。

そして、プロジェクトの最終章としての個展では、湧水町の人々から集めた手編みの編み物とエピソードを媒介に、様々な人と関わりながら一人ひとりのかけがえのない物語に寄り添ってきた平川による、新作を含む作品を紹介しました。

およそ2年に及ぶ今回のプロジェクトの軌跡を通して、手編みの編み物に込められた編み手の想いやそれを受け取った誰かの日常に思いを馳せることになるでしょう。自分ではない誰かの日常が織りなす普遍的な物語を体感してみてください。

主催者



かなたのあなたと会話するころみ

これまでは自分が様々な地域に出かけて行って、土地や人と関わりながら滞在制作をするやり方で作品をつくってきましたが、個展のお話をいただいた 2020 年当時は自分の環境の変化やコロナ禍という状況でこのような作り方をすることが難しく、「モノ」を媒介としてそのまわりにいる人々と関わり、作品を編み出すことを試みました。

湧水町という限定した地域を対象に「手編みの物語をあつめる」プロジェクトを立ち上げ、家にある誰かが編んだ編み物と、その編み物についてのエピソードを募集しました。

ここで集まった 20 人分の手編みのニットと物語を出発点として、今回の新作「いとなみの風景」は展開していきました。

誰かが編んだ毛糸の編み物を手にしたときに、既製品にはない何かが宿っているような感覚を持った体験は、誰しもあることと思います。その何かが制作の手がかりでした。

一般的に、セーターや帽子などを編むときには「編み目記号」によって設計された「編み図」があり、編み手はそれを解釈しながら編んでいくという

プロセスがあります。この独自の記号が編み手の共通言語のように感じられ、自分が編んだ新作についても未来の誰かへ向けた手紙のようなつもりで、この記号を書き起こしていきました。また、ほどいた毛糸でニットだったときの編み地を再現するように作品を編んでいると、会ったことのない編み手と会話をしているような感覚がありました。

時代も場所も境遇も違う誰かとのあいだに、一つでも多くの共通する言語を見出し会話を試みることは私にとって、希望を求めるアクションでもあります。

多くの方の協力をいただき、展覧会を行うことができました。心から感謝いたします。ありがとうございました。

平川 渚

彼女が編み続ける理由

他者の人生の語りを聞くことに関心があり、近年インタビュー集を手にすることが増えている。個人が自身を振り返り、思い出しながら過去や日常を語った、または綴った言葉の数々は、小さき個人の体験の中にこそ歴史の本質があることを教えてくれる。

平川の「手編みの物語をあつめる」プロジェクトもまた、手作りの編み物を通じて偶然出会った人々の、ひとりひとりの物語に注目した「生活史」プロジェクトといえるだろう。

しかし、彼女のそれには、編み物をめぐる物語を、編み手の頭の中にある記憶だけではなく、手間暇かけて編み続けた手の記憶から紐解くという際立った特徴がある。ワークショップと展示会を組み合わせることで、一本の糸としての「あなた」の体験を協力者や参加者、鑑賞者という次なる「あなた」の糸と交わせ、「かなた」の「あなた」にまで編み継いでいこうとしている。

プロジェクトの始まりとして、彼女は湧水町の人々が提供した全ての編み物をそのままの姿で編み合わせて大きなスクリーンをつくり、一人一葉の紙に印刷された編み物をめぐるエピソードと併せて湧水町くりの図書館に展示した。それら全体が「いとなみ」という一冊の記録集を編集する行為のようでもあり、プロジェクトの方向性がはっきり示された瞬間でもあった。

編み物は個別に撮影された後、ワークショップに集った人々の手でほどかれ、再び毛糸玉に戻った。ささやかな「いとなみ」の集大成として《いとなみの風景》が姿を現すためには、編み手の痕跡、手の記憶がはっきり残る毛糸で編み直す必要があったからだ。

編み物の記録写真から編み方を調べ、編み目を数え、時には編み手本人に教を乞いながら編み直されたのは、《いとなみの風景》のパーツ。それらは元の編み物の特徴を色濃く滲ませながらも再現ではなく、全く新しいかたちに生まれ変わっている。そして、その全てが編み図におこされ、併せて展示されたことにもプロジェクトの本質がよく反映されていた。

編み目記号で構成された編み図とは、編み物の手順図、言わば設計図のようなもの。平川はそれを「共通言語」として捉えたいと繰り返し語る。共通言語を使って提供された編み物というテキストを読み直し、読み解いた物語に対する返信、もしくは返礼としてパーツを編み直し、再びそれらを共通言語化したのだった。共通言語を通じて会ったことがない編み手とも、会うことができない過去や未来の編み手とも、時空を超えた会話は何度でもできると彼女は考える。

名もなき編み手たちの尽きない創作意欲と高い技術力、編み上げるまでに費やした多くの時間、そしてそれぞれのかけがえのない日常と人生に敬意と共感を込めて、彼女はひとつひとつパーツを編み直し、編み図をおこし、さらに全てをひとつに編み合わせていった。展示会場の中央に置かれた《いとなみの風景》と壁の編み図は、編み手との偶然の出会いを必然と受け止めた、平川自身の「いとなみ」の形でもある。

会期中に開催されたイベントのひとつ、野村誠コンサート「Knitted score」では、野村が展示された編み図を作曲家として読み解き、再解釈した9曲が展示会場で演奏された。編み図と楽譜の関係性の妙味と創作された曲の多彩さが印象に残る。記号と編み目が呼び交わすようにしてひとつの音になり、音が連なって空間に曲を編みあげていく様は本当に美しかった。

繰り返し思い出すことは、生き直すことであり、それは世界と出会い直すことでもある。風景に向き合いながら会場で編み続ける彼女の姿は、そう語っている気がする。

川浪千鶴（インディペンデント・キュレーター）

プロジェクトの流れ

2021年4月15日(木)～5月30日(日)

募集場所：くりの図書館、湧水町観光協会、吉松物産館ふれあい市場、鹿児島県霧島アートの森

湧水町在住の方を対象に手編みの編み物とそれにまつわるエピソードを町広報誌やチラシを使って募集し、20人から20通りの物語と28点の編み物が集まりました。



2021年6月～9月

集まった編み物28点のあいだを平川が金糸を編み足して繋ぎあわせ、全体がひとつになった大きな作品として制作しました。

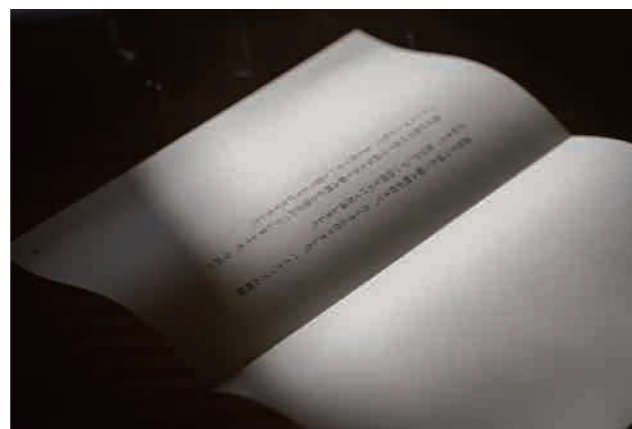


2021年10月1日(金)～11月7日(日)

会場：くりの図書館

手編みの物語をあつめるプロジェクト展「いとなみ」を開催し、編み繋いだ作品を展示しました。
編み物についてのエピソードは会場の図書館の一室に本のページに見立てて展示しました。





2021年10月2日(土)・11月7日(日)

会場：くりの図書館

編み物の提供者と、これまで編んできたものや提供した編み物についての詳しいエピソードなどを直接語り合うあみもの座談会を開催しました。



2021年11月12日(金)～11月21日(日)

会場：くりの図書館

展示した編み物のうち、寄贈いただいたものを糸にほどくワークショップを開催しました。
参加者の手によって編み物がたくさんの毛糸玉へと姿を変えました。



2022年5月27日(金)～6月1日(水)、6月28日(火)～7月2日(土)、10月29日(土)～11月6日(日)

会場：くりの図書館

ワークショップでほどいた糸を、再び編んで作品にする作業を公開制作をしながら行いました。写真から元の編み地を再現しつつ、編んだ内容を編み目記号として編み図に記録していきました。



2022年12月21日(水)～2023年2月12日(日)

会場：鹿児島県霧島アートの森

個展「かなた／あなたとの会話」で完成した作品を展示しました。再編した作品に加え、編み図、写真、映像、アニメーションなどで展示内容を構成しました。



かなた／あなたとの会話



- 《いとなみの風景》2022年
- ・アニメーション(ループ再生)／制作：権田直博
 - ・編み物作品／制作協力：折田順子、玉作サダ子
 - ・編み図
 - ・写真／撮影：森山年雄
 - ・映像「エピソード」(5分45秒)／デザイン・制作：山平美保
アニメーション：権田直博
 - ・映像「ほどく手」(10分3秒)／撮影：下園詠子
- ※資料展示
楽譜・音楽「Knitted Score」／演奏：野村誠(35分54秒)

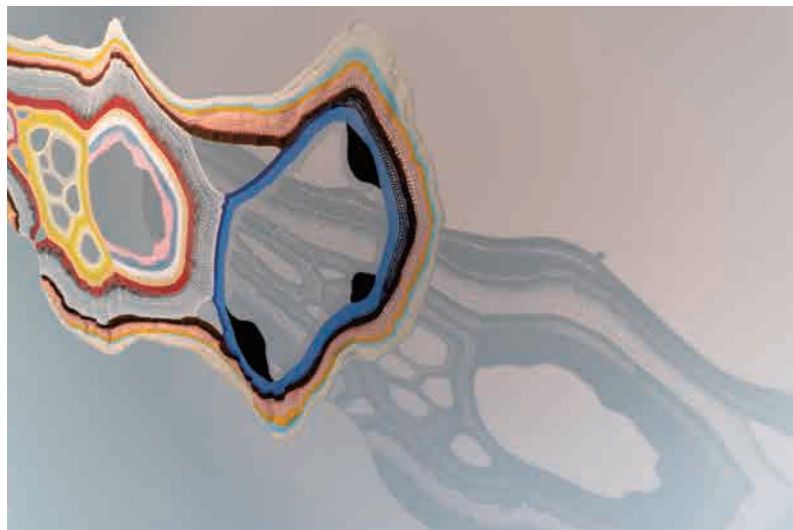


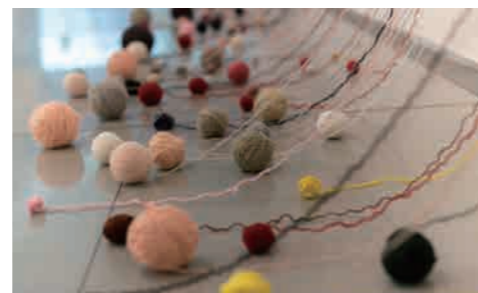


《終わらない物語》2017年
糸、ワイヤー
都城市立美術館蔵



《物語のつづき》2017年
糸、ワイヤー
都城市立美術館蔵



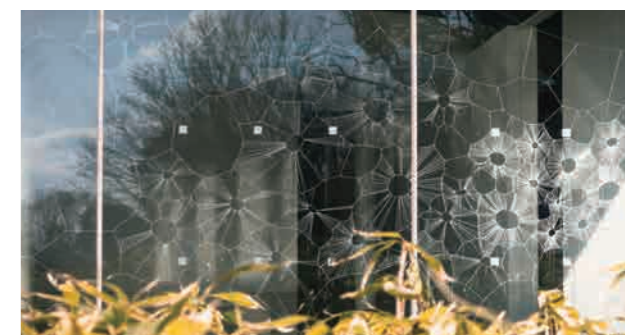


《終わりのない物語》2017-2022年

・糸の作品
 ・パネル／デザイン・制作：崇城大学芸術学部デザイン学科馬頭研究室
 写真：森山年雄

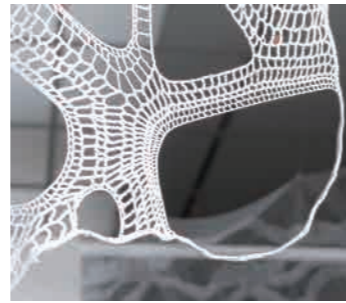
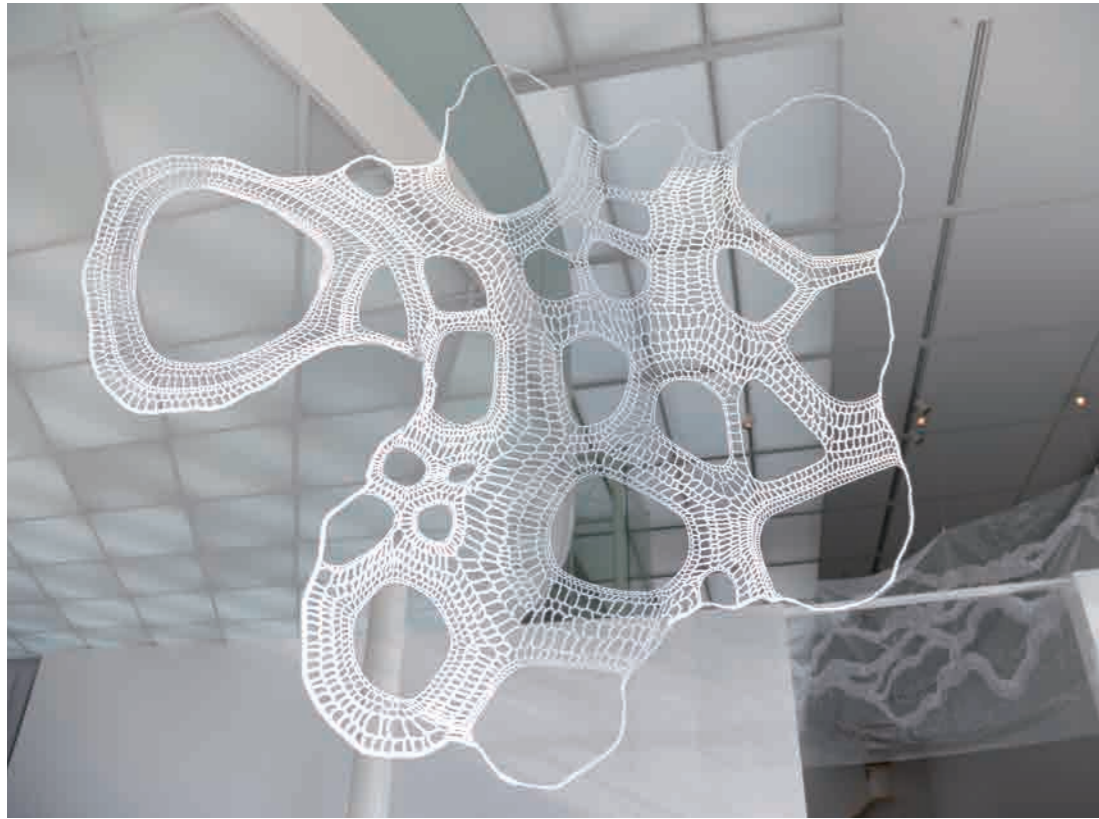
・モバイル／デザイン・制作：崇城大学芸術学部デザイン学科馬頭研究室

2017年に全国から手編みのニットとエピソードを集め、それをほどいた毛糸で編んだ作品。当時発表したものに今回また編み足し、2022年の形態として展示した。また今後も編み足しながら形が変化していく予定。

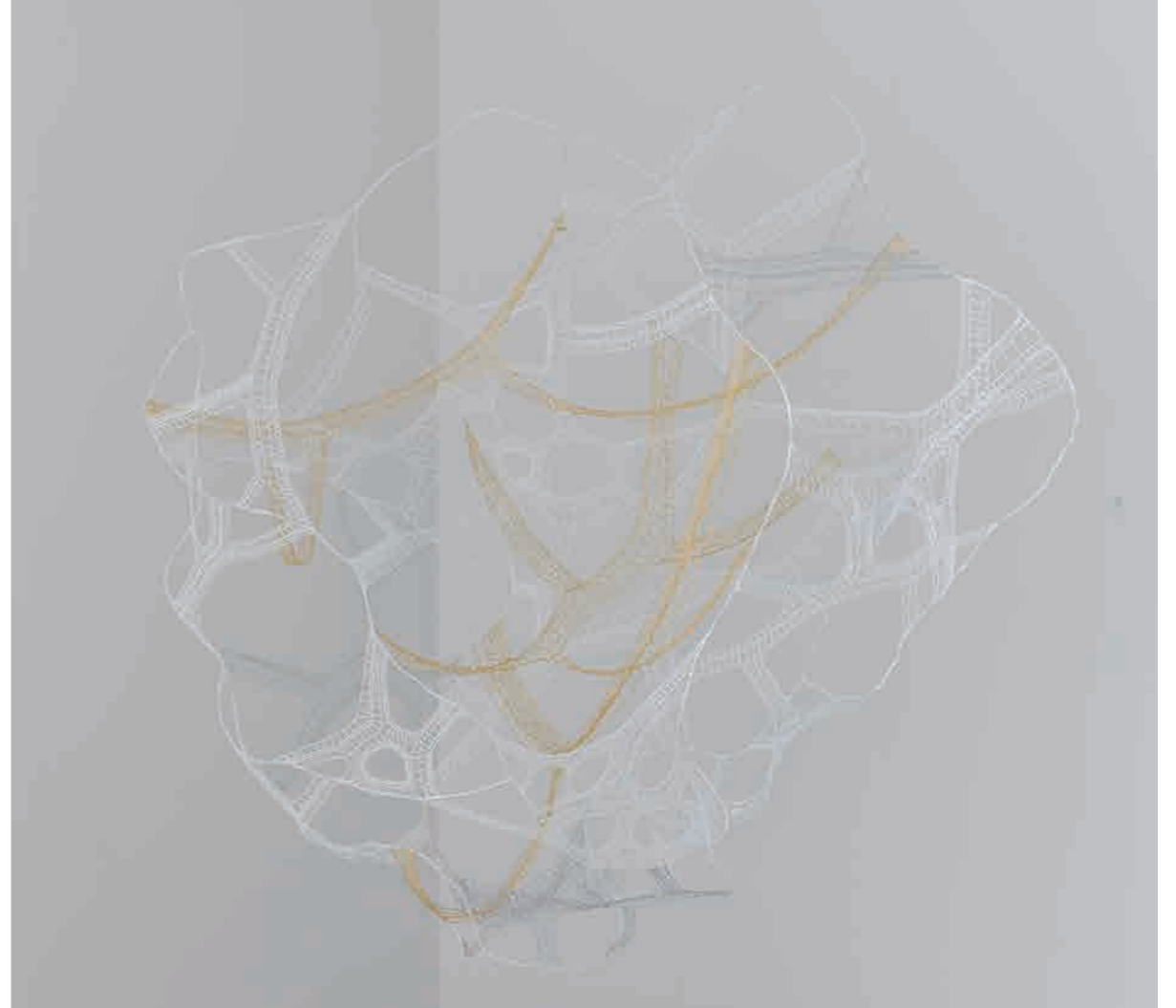


《空(くう)に刺繍》2022年-2023年

糸
 会期を通して公開制作で作成。窓の外の移ろいゆく景色や光、時間を内包した空間そのものに糸を縫い込んでいった。



《空相 01》2020年
糸、ワイヤー



《目の前の現実に針を刺す》2021年
糸、塩化ビニルシート
長島美術館で開催した「生きる私が表すことは。」展で8日間の会期中、実際に会場で制作した作品。透明ビニルシートを隔ててこちら側から会場の風景に対して糸で針を刺し続けたもの。



《空相 02》2022年
糸、ワイヤー

クロストーク「彼方のあなたと会話するために」

「手編みの物語をあつめる」プロジェクトや個展の内容について、現代アートシーンを長く観察してきた川浪千鶴さんと平川によるクロストークを行いました。編み物を提供した方のお話や手芸について、地域における美術館の役割などにも話題が及びました。

【日時】12月25日(日)14:00~15:00

【登壇者】川浪千鶴(インディペンデント・キュレーター)×平川渚

川浪千鶴(インディペンデント・キュレーター)

2018年まで福岡県立美術館学芸課長、高知県立美術館企画監兼学芸課長等を務める。専門は日本の近現代美術、美術館活動史、アートと社会の関係性について。大学で教える一方、九州の女性アーティストを支援する活動も行う。美術評論家連盟会員。福岡市在住。



レクチャーパフォーマンス「未来からの返信」

演劇や舞台美術に携わってきた佐々木文美さんが、展示内容にあわせて作成したスクリプトと会場の作品を交互に行き来しながら、ツアー形式で来場者にあらたな鑑賞体験を促すパフォーマンスを行いました。

【日時】1月8日(日)14:00~15:00

【パフォーマー】佐々木文美[セノグラファー/快快(FAIFAI)]

佐々木文美(セノグラファー/快快(FAIFAI))

1983年生まれ、鹿児島県出身。多摩美術大学造形表現学部映像演劇学科卒業。快快(FAIFAI)メンバー。演劇、ダンス、コンサート、展示、MV等多種多様な企画に舞台美術、セノグラフィーとして参加。ホームパーティーをするのが好き。 <http://sasasakiyami.info>